

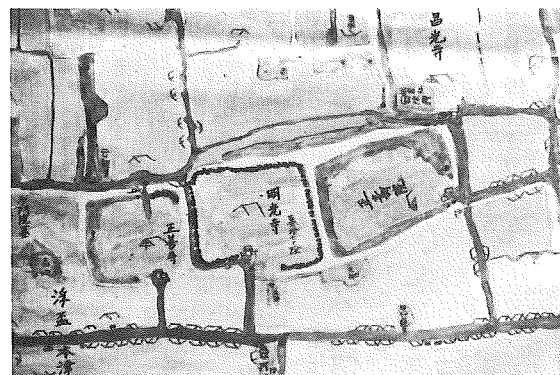
長子ハ昌興、次ハ昌寿、三八昌善、皆早世ス、菩提ノ為メ二三所ニ寺ヲ建ル、今ニ昌興寺、昌寿院、昌善寺ノ三ヶ寺是ナリ。

寛政四年（一七九二）の『川副東郷為重村』の絵図によれば、三寺は昌光寺、昌寿院、正善寺の字で、浮盃津の北に隣接して記されている。この三寺も多聞院の末寺であり古刹であろう。なお、後世三寺は多聞院に合併された。また、一四世紀前半ころ、定良駿河守の末子は出家して慶照と名のつた。そして、駿河守の法号万福をそのまま寺号として、万福寺の開基となつたと伝えられている。

五 荘園制の拡大と武士の抬頭

延暦十三年（七九四）、桓武天皇は平城京から平安京（現京都市）に遷都した。これより一二世紀の終わりごろまでを平安時代という。平安時代は奈良時代までに中国・朝鮮から学んだ政治や文化が、次第に日本的なものに発達した時代である。平安中期以降は、前代に施行された律令体制は次第に崩壊し、天皇の政治力は衰退した。かわつて天皇を補佐する摂関家（藤原氏）が抬頭し、施政の中心となつた。

奈良時代から班田農民の人口が増加して、口分田が不足してきたので、律令政府は開墾を奨励した。政治力・経済力に富む有力貴族・寺社は、積極的に開墾を実施するとともに、公有地を占有して私有地化した。この私有



『川副東郷為重村』絵図より
正寿、昌光、正善の三寺付近

が出たものではなかつたらうか。しかし、寺井の呼称由来については諸説がある。一説によると、徐福がこの地に上陸して手を洗うための井戸を掘らせたことにより、寺井（手洗井）という地名が起つたという。『葉隠聞書』（第六）には、「御国古来の受領は寺井神、通院にてこれありたる由」とあり、寺井は国司交替事務引き継ぎの場所と言ひ伝えられていたことが知られる。また、『太宰管内志』によると、中国の「図書編」にも、寺井の名がある。

『新北村史蹟』には、

寺井津万福寺住職定良悦応所蔵「寺井由来記録」ニ云

寺井元ハ照江ト名ク、行基菩薩菩提僧正ヲ送り、当国ニ来テ、天山ノ峰ヨリ此ノ入江ヲ見給フニ、江上ニ光アリテ照ス、故ニ此名ヲ立テ給フト、此處ニ領主アリ、定良駿河守ト号ス、四人ノ男子アリ、

院をあげ、次に華藏院・吉祥坊・不動坊の三寺は破壊地となつている。為重の多聞院は坊中に惣持院・真俗院の二寺をあげ、次に長慶寺・淨心院・蓮藏院・愛染院・普賢院・玉藏院・理性院・正福院の八寺は破壊地となっている。坊中に多くの寺院をかかえた安龍寺・神通院・多聞院の三つが盛えた寺井は、筑後川の河口港として多くの人々の賑いがあつたであろう。だが、神通院は安龍寺に合併され、その安龍寺も多聞院と共に現在にはひっそりとした堂宇を残すのみである。いずれにしても、この地は多くの寺が創建されたところであるから、寺井津の名

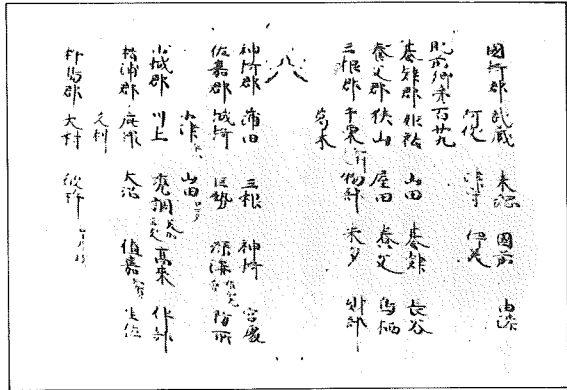
地を荘園という。

承和三年（八三六）神埼郡の空閑地（くが・こがとも読み、後世には古賀の字もあてられる）六九〇町が仁明天皇の命令で開墾する勅旨田となった。これが県内で最も古く、かつ広大な荘園であった神埼荘の発端である。この荘は天皇の私領となつて、その隠居した上皇や院（上皇の居所）の御領となり、上皇の重要な財源となつた。一般には神埼御荘と尊称した。神埼荘は時代とともに荘域を広げ、一三世紀には三〇〇〇町歩の面積をもつに至つた（『河上神社文書』「河上造宮田所渡田惣田数」）。つまり、神埼郡全体が荘園化したものと考えられる。その神埼荘の南限は佐賀江だつたと考えられる。承平五年（九三五）源順が著わした『和名類聚抄』（通称和名抄）には、

神埼郡 蒲田 三根 神埼 宮處

佐嘉郡 城崎 巨勢 深溝 防所 小津 山田

とあり、神埼・佐嘉両郡に一〇郷の郷名をあげている。これによれば神埼郡蒲田郷と佐嘉郡巨勢・小津両郷とを結ぶ線より南には郷は存在していない。これは、郷と称するだけの大集落はなく、当時の諸富付近は小集落が点在する程度だったのであるとみるより、郷名が相当数欠落したものと考えられる。というのは新北神社所蔵の『新北大明神御由緒』の「神領在所」によると、現諸富町内でも三重・徳富・小杭・野町・寺井の五村において条里

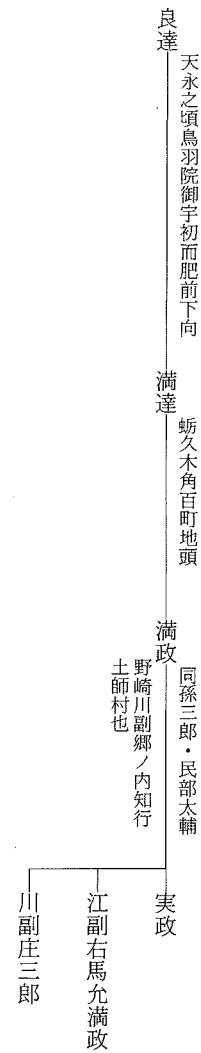


和名抄の神埼、佐嘉両郡の御名

制が実施されていたことが十分に考えられるところから、相当な集落が存在していたことが十分に理解される。つまり、一〇世紀には当町域は完全に陸地化し、既に耕地化していたと考えられる。

この平安期に肥前国に存在した太田荘と三重屋荘とを、当町内に認めるか否かの問題がある。太田荘は宜秋門院領から関白九条道家の領となり、正応五年（一二九二）の「河上宮造管用途支配惣田数注文」（『河上神社文書』）に、「太田荘 二百五十四丁」と記されている。同文書に記された「三重屋荘 二百七十五町五反」は、当初七条院に属し、のちには室町院領となつて存続している。しかし、太田荘を当町の太田に、三重屋荘を同じく三重に存在していたとすれば、両荘の面積が多めで、とうてい当町域におさまり得ないこと、三重の西北に隣接する現川副町南里地区は正応元年（一二八八）の『高城寺文書』によれば、いまだ開墾の途中であること、さらに三重屋荘は『河上宮古文書』の正平九年（一三五四）の「免田島等注文」に、「小津東郷三重屋荘」と記されており、小津東郷が三重地区を含むことは不可能であること、また、文保二年（一三一八）の「免田坪々領主交名事」（『河上神社文書』）に乙太田が小津東郷とある。この乙太田は当町の太田に比定される。以上を総合的に判断すると、太田・三重屋両荘が当町域に存在したとする見方は、やや無理があるように考えられる。但し、「龍造寺家政申状草案」（『龍造寺家文書』）に、「三重屋新荘田三町」とあり、正平六年（一三五二）当時は三重屋荘と同新荘が併存していたことがわかる。そこでこの三重屋新荘も当町の三重と無縁かどうかは言明できない。ともかく平安期の当町は徐々に川副荘の荘域化し、独立した荘園は存在しなかつたと考えられる。行政的にはおそらく「佐嘉郡小津東郷」と呼称されていたものと思われる。その後川副郷が設けられると、それに編入されたのであろう。

中央では摂関家藤原氏の政治力は大きく動揺し、一二世紀後半白河上皇による院政が開始された。地方政治も次第に混乱をみせてきた。一二世紀にはいと、当町における文献上初見の豪族が下向してきている。天永年間(一一一〇〜一一二二)より少しあとの一二世紀半ば、土師村に京都出身の右近氏が下着した。『肥陽諸系図』(佐賀県立図書館所蔵)の「右近之系」によれば



とある。右近良達が初めて肥前に下向し、その子滿達は蛸久・木角(現佐賀市鍋島町)一〇〇町の地頭となった。滿達の子滿政が川副郷内の土師村に土着したことわかる。土師には古く土師部(朝廷に献上する埴輪・土師器を製作した技術者集団)が居住していたとする説もあり、平安時代後期には右近氏が進出してくるなど、古代の当

町域における拠点のひとつであった。

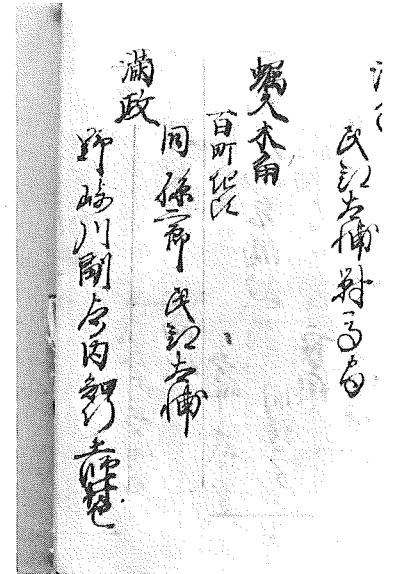
大治元年(一一二六)の「櫛田社大宮司職補任状」(『櫛田神社文書』)によれば、

蒲田 若宮同免 末社小社

とあり、蒲田津(現佐賀市蓮池町)の若宮社は櫛田神社(現神埼郡神埼町)の末社である。櫛田社は神埼荘の第一社であり、その末社が蒲田津にあるということは、蒲田津一帯は当時既に神埼荘の荘域内にあったことを物語っている。

川副荘は鳥羽天皇の勅願によって建立された京都の最勝寺の寺領であった。平安末期に源師時が記した日記『長秋記』によると、川副荘より二〇〇石納められるべき年貢米が、八〇〇石しか納入されていないと書かれている。それは同荘が新立で収獲が不安定だったからである。つまり、川副荘は一二世紀末か一二世紀初めに立券(荘園設立のための手続きをとること)されたものである。年貢米二〇〇石といえは大規模な荘園で、正応五年(一一九三)の「川上造宮田所渡田惣田数」(『河上神社文書』)には、一〇六七町一段となっており、現在の佐賀市北川副町、佐賀郡川副町の有明海に臨む地域にあったのであろう。当町域も西部より次第に川副荘の荘域に含まれていき、鎌倉期にはほぼ町域全体が川副荘となったと考えられる。

神埼荘は院御領であり、院の重要な収入源であったが、平忠盛(清盛の父)は同荘の荘官として下向し、長承二年(一一三三)院宣と称して、宋の商船を同荘に迎え入れ、貿易の利を独占している。その取引地は城原川と筑後川の合流地の蒲田津か大堂・徳富付近と考えられる。前述したように徳富権現堂遺跡からも宋銭が発見されているのは、そのことを裏付けするものである。そして、昭和五十八年(一九八三)佐賀江改修工事の現場から



『肥陽諸系図』の右近氏系図
(佐賀県立図書館所蔵)



綾部城跡遠望、右手鳥居は綾部神社
(三養基郡中原町)

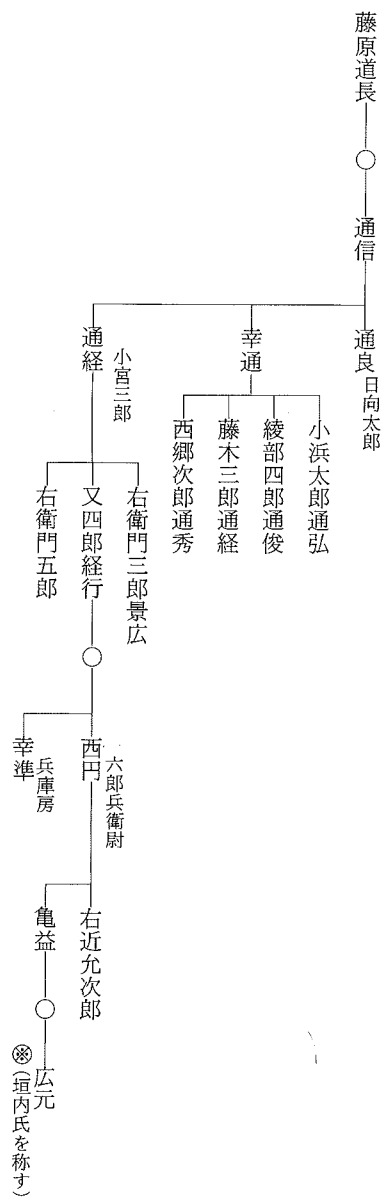
光法)の地頭になった。経行の弟幸準は建武新政の頃(二三三四)、同莊光益名の地頭職を得ている。西円の子次郎(のち右近允)は父の跡を継ぎ、のち弟の龜益にその遺領を譲っている。この龜益の孫広元が垣内氏を称している。ところがいま原史料が散逸し、詳細な考証は不可能となった。系図でみるかぎりでは、日向太郎通良一族は、肥前の中東部から島原半島にかけての所領所職をもったかなり有力な豪族であったことがわかる。

この日向太郎通良が平治元年(一一五九)、突然綾部城に拠って平氏に叛いた。朝廷は平清盛に鎮圧を命じた。清盛は家来の平筑後守家貞を派遣して平定にあたらせた。家貞は九州に下向し、数ヵ月にわたる戦いののち、翌

永暦元年(一一六〇)四月これを討伐し、通良など主だった者の首を携えて京都へ帰った。『公卿補任』(神武以来明治元年に至るまでの公卿の氏名・官歴を年代順に記したもので、高官職員録)の二条天皇の条の永暦元年のところには、平清盛が同年の六月二十日に位を二階級進められて、正三位に叙せられたことが記されている。さらに仁安二年(一一六七)八月、肥前杵島郡と肥後御代郡等を大功田として賜っている。これらは日向太郎の反乱を鎮めた功績であろうと考えられる。通良の反乱の理由は不明であるが、当時の不安定な地方の情勢が理解される。つまり、律令体制の破綻と莊園体制の進展など、新しい社会への移行過程における辺境の不安と、それに対応する在地領主層の動きに注目しなければ

も宋銭等日宋貿易を裏付ける遺物が発見された。

『東川副村誌』によれば、戦国期に当町福田を拠点として活躍した垣内氏の系図を記している。同系図には、



とある。通良は父通信が日向守であったところから、日向太郎と称していたようである。また、軍功によって神埼郡坂本(現神埼郡東脊振村松隈)を給与され、肥前に下向してきたという。その後西肥前の嬉野・白石を領し、宇礼志野・白石氏を創設したという。幸通は肥前権守となり、源頼朝時代に肥前綾部莊(現三養基郡中原町)の地頭となった。通経は武藤国秋富莊の地頭になった。通経の子景広は肥前国高来郡福田邑(現長崎市福田町)の地頭になった。景広の弟右衛門五郎は肥前国伊佐早田給(現長崎県北高来郡飯盛町)の地頭になっている。同じく弟又四郎経行の孫西円(六郎兵衛尉)は、花園天皇(在位一三〇八〜一八)の頃、川副莊光法名(現北川副町

一 川副荘と干拓事業

中 世

現在の佐賀県領域内で最も古い武家は、佐賀郡の高木氏である。源頼朝が平家を討伐すると、高木・龍造寺・国分・草野・綾部の諸氏は源氏に味方した。頼朝は建久三年（一一九二）天野遠景を鎮西奉行とした。同七年（一一九六）にはその後任として、武藤資頼・大友能直・島津忠久の三将を命じた。武藤資頼は大宰の少弐（大宰府の次官）に任ぜられ、以後この職は代々武藤氏に世襲された。のち武藤氏はこの官名をとって少弐氏と称した。源頼朝は文治元年（一一八五）諸国に守護をおいたが、肥前守護は筑前・豊前とともに武藤氏が就任した。但し永仁五年（一二九七）以後は、鎮西探題職が兼務することになった。また、各所の荘園には地頭がおかれたが、治承・寿永の乱で藤原季家が平家に味方しなかったということで、今までどおり佐賀郡龍造寺村（現佐賀西高等学校付近）の地頭に任命された。この藤原季家が戦国大名の龍造寺氏の祖である。

鎌倉期の諸富町一帯を知る史料に『高城寺文書』がある。高城寺は佐賀郡大和町大字久池井字春日にあり、春



現在の多聞院

ばならない。

当町為重には平氏に関係した伝承が残っている。平清盛が日向太郎通良追討で西下した際、その将平美濃守為重も同行してきた。為重は通良追討が終了すると、川副荘内に居住した。そこでこの地を為重と称することになったという。ところが、平氏が壇の浦の合戦で敗北すると、その落武者は四散し、人目を忍んで土着した。佐賀の地にきた落武者も多く、為重を頼つてきた三武将は京都の公家の出身であった。彼らは多くの家来の霊を弔うべく髪を切つて出家し、昌常寺・昌光寺・昌善寺の真言宗の三寺を建立したという。昌光寺と昌常寺は多聞院に合祠された。昌善寺はのち日蓮宗に改宗したが廃寺になったという。前述した「寺井由来記録」と共通した部分があり興味深い。